

ふるさと絵屏風で 幸せな旅立ちへのお手伝い

【山内名物語り部、逝く】

山内エコクラブの活動は、地域の高齢者の方お一人お一人のお力があって成り立っています。

当然、お別れはつきもので、できるだけご本人さんが満足して最期を迎えることができることも、心がけており、これまでも何人かの高齢者の旅立ちをみてきました。

先日も、山内のふるさと絵屏風の立役者ともいえるHさんが他界されました。

絵屏風の完成と、1年半の語り部活動ののち、病床に就かれ、その後病状が思わしくないとは聞いていましたが、関係者は「まさか。あの元気なHさんが」と大変ショックを受けました。

早口で「勉強しゃんと（しないで）悪いことばかりしていたしな〜」で始まる子供の頃の思い出話は本当にみんなを笑わせ和ませてくださいました。「竜王さんがな、真っ白い大きな紙を持ってきて、『描いてくれっ』と言われてな〜そんなことできるわけないやないかって(笑)、振り返ったら、(一緒に描く人が)だれもおらへんさかいに善ちゃんとお栄ちゃんとやることになってな。小学校から70年、絵なんて描いたことないのに、そんなもん、大変やったでえ〜」と。

これもネタにしながら、山内地区の第一号である山中絵屏風完成を皮切りに、6地区の絵屏風完成をけん引してくださいました。雪の多かった2か月間、雪かきをし、公民館での絵屏風製作、もともと鹿の角を使っての製作やしめ縄づくりの名手でもあったため、根気強く関わってくださいました。面白い話はあっても、他人の悪口は言わない、その中でもHさんの存在がなければ進まなかったかもしれせん。

お披露目コンサートでは、「学校では立たされてばかり、鉛筆なんて持ったことがないのに、・・・こんな大勢の前で話したことがないのに、・・・」からはじまる昔語りで、200人の観客を盛り上げてくれました。

最後の語りは、思い出ウォークで昔の小学校道をみんなで行った時でした。

体力が落ちてきたため、みんなとのウォークは辞退、みんなが歩くあとを軽トラで追いかけて、山頂での戦時中の話は軽トラ上、これが最後のステージでした。

いろいろなところで身振り手振りの語り部をしてくださいました。私たちはHさんから学問でもなく歴史でもなく「生きてざま」を学びました。

残されたご家族に感謝と労いを込めて、動画QRコード付き写真パレットを送りました。

偉業を果たされHさんには、感謝しかありません。



【ベットの下から出てきたメッセージ】

3週間後、亡くなられたHさんの奥様から絵屏風を一緒に描いていた仲間の栄一さんに1本の電話がありました。



「亡くなった主人の布団やベットの整理をしていました。そうしたら、くしゃくしゃになった紙切れや薬の紙の裏に何か書いたものがたくさん出てきました。そこには、走り書きで、こう書いてあったんです。」

『わしみたいに勉強もできひんもんが、最後の最後に絵を描いた』
『栄ちゃんや善ちゃんとしゃべりながら描いた、そして、みんなの前でしゃべったりもした。ほんまに楽しかった、幸せな時間やった』『これからも頑張りたい』
『自分がいなくなったらみんなにありがとうとお礼を言ってほしい』と。
奥様は電話の向こうで興奮しながら、泣きながら、その紙切れに書いていたことをひとつひとつ読み上げられました。



奥様は、加えて「栄ちゃんが持ってきてくれた下書きの絵屏風パーツに色を塗ったりもしていた、けど体力がなくなってきて『もうあかん』『ある日は病室では本人は悔しがってワンワン泣いていた、もうみんなと一緒にできないことを、残念がっていました』と話されました。

子どもの頃の悪ふざけ、盗み食い、「勉強なんてしなかった、牛のかけ合いを子どもながらに面白がって見に行ったら『子供の見るものやない!』と近所のおじさんに怒られた」等、相手がどんな先生であっても飾り気のないありのままの持ちネタが自慢のようでした。

もっと生きてH節を聞きたかった
Hさんも語りたかったでしょう。



でも、痛みや苦痛と闘いながら、最期の最期に
「80年生きて最後に『幸せな時間だった』と言ってくださったHさん、絵屏風製作はなじみの友と一緒に、自分の人生を振り返り、幸せな気持ちで旅立つことができたのでしょうか。あちらの世界では、諸先輩にH節で最期の偉業を自慢されているかもしれませんね。



最期の時間に「ワシでも役にたったか? どうや、竜王さん」と喜んで旅立っていただけていたらやまえこ活動は本望です。

そして、Hさんに続く幸せな旅立ちをできるだけお手伝いしていきたいと、ささやかな誓いをしました。(Ryu)